

# TOEIC 教材を言語学的に検討する —メトニミーの扱いをめぐって—

萩澤 大輝

## 要旨

英語の実態として、ある名詞（句）の意味の焦点が一文中で揺れ動くことがある。例えば Feeding the growing world population is a significant challenge. において、population は増加する数値であると同時に、食料を与えられる人間でもある。本稿では、市販の TOEIC 教材を題材として取り上げ、認知言語学の観点からこの種の言語現象（メトニミー）の取り扱いについて検討を加える。TOEIC 教材ではメトニミー表現の説明が十分とは言えないケースが散見されるが、認知言語学の知見に基づけば自然な形で説明できるものである。本稿はその議論を通じて、言語理論と英語教育を架橋することの意義を示す。

## 1. はじめに

以下の英文は定評ある TOEIC 講師による教材からの抜粋である（以下、太字や下線の処理はすべて本稿筆者による）。述語や修飾語を手掛かりとして、太字部分の意味を考えよう。まず (1) の postage の意味は、calculate（計算する）の目的語だという点を考慮すると「送料」という抽象的な数値だと思われるが、affix（貼り付ける）という行為の対象であることを考慮すると、具体的な「ラベル」（証紙）だとも思える。一体この postage はどちらの意味なのだろうか。

(1) Postal clerks calculate and affix the correct **postage** on letters and packages.

(TEX 加藤 2019: [233])<sup>1</sup>

(2) Furniture **purchases** made online may be returned or exchanged at any Tex Furniture location within 14 days of the original order date.

(TEX 加藤 2013: 95)

(2) の purchases の意味を著者自身は次のように解説している<sup>2</sup>。「述語動詞が may be returned or exchanged ですから、主語は「返品・交換できるモノ」でなくてはいけません。「購入」は、返品や交換はできませんよね。従って、ここでは「購入品」という意味が妥当であると分かります」(TEX 加藤 2013: 94)。しかしこの purchases の意味は、文前半にある made online（オンライン上でなされる）との関係を考えるなら、まさに「購

入」というプロセスであるようにも思われる。この purchases も、解釈を一意に定めがたいわけである。

上例の太字部分の名詞が「送料」と「証紙」、あるいは「購入」と「購入品」の一方のみを一貫して表すという立場は維持することが困難である。いずれを選んでも、文中のどこかで解釈が破綻してしまうためである。本稿はこの種の現象（メトニミーの一種）に注目し、名詞句の意味ないし指示対象が一文中で揺らぐ事例の存在を指摘した上で、これが TOEIC の教材でどのように扱われているかを検討する。

議論に入る前に本稿の位置づけを簡単に述べておく。現在、TOEIC に関する論文は大量に存在するが、その多くは指導法の実践報告などであり、TOEIC で出題される英語表現に言語学的な観点から分析を加えるものは少ない。その数少ない研究の中で、まず長谷川剛による論考が目目を引く（長谷川 2016, 2022）。長谷川は TOEIC 教材の文法解説に不備が散見されることを指摘している<sup>3</sup>。もちろんこの研究以前にも、一般的な英語参考書の記述の妥当性を吟味する研究としては河上（1991）などが存在するが、TOEIC 教材を対象を絞ったものは珍しい。そのため長谷川の研究は、TOEIC 教材の分析という分野に先鞭を付けた点で一定の意義を持つ。また、澤田茂保による一連の論考は（澤田 2020, 2021, 2022）、TOEIC の問題に見られる特徴的な表現を言語学の知見に基づいて整理・分析したもので、学術的にも教育的にも価値のある研究である。本稿はこうした先行研究と軌を一にする。

もちろん TOEIC 教材のあらゆる側面を吟味することは不可能であるため、本稿はメトニミーが関わる表現に焦点を絞る。メトニミーは余剰的な修辞技法ではなく、英語のみならず自然言語の根幹をなす現象である（Langacker 2009）。そのため TOEIC の問題文でも頻繁に観察される。そして、母語以外の言語におけるメトニミー表現に触れた学習者は、その解釈に困難を覚えることがままある（Littlemore et al. 2018, Zibin et al. 2020 など）。したがって、教材作成者やそれを使用する教員は、メトニミーの特徴を理解した上で、（必要に応じて）解説できることが望ましい。本稿はその一助となることを目指すものである。

本稿は市販の TOEIC 教材の記述内容を網羅的に調査することが目的ではない（この点は上述の長谷川も同じである）。対象とするのは公式問題集および冒頭で引用した TEX 加藤による参考書に限定される。いずれも質の高さで評価されている教材であり、その教育的価値を否定する意図はない。ただ、そのような教材であってもなお、言語学的観点からは改善の余地が残されている。その指摘を通じて、言語理論と英語教育を接続することの有効性を示すことが狙いである。

本稿は全体として、冒頭の不可解な例文のいわば「謎解き」を目指す構成となっており、その議論をもとに教材の記述改善も提言する。以下、2 節と 3 節はその準備段階に当

たる。まず2節では一時的に(1)(2)の例から離れ、メトニミーという現象そのものを概説する。この2節では続いて「くびき語法によるテスト」も導入する。これは、あるひとつの語に一文中で異なる意味を担わせようとする不自然なることを利用した、語義の個別性の判断手法である。ところが、メトニミーによる多義性はこの一般則の例外となる可能性があることが示唆される。3節では実際に、単一の名詞句が(くびき語法特有の不自然さを帯びることなく)複数のメトニミー的な意味で用いられる例が存在することを確認する。以上の議論を踏まえて4節では冒頭の例に立ち戻り、その適切な解釈を議論するとともに、TOEIC教材による説明の妥当性にも検討を加える。5節はまとめにあてる。

## 2. メトニミーの導入

### 2.1 概説

手始めに以下の文を考察しよう。なお、本稿における英文の日本語訳のうち、角括弧の中に記載しているものは本稿筆者によるものである。

(3) Nixon bombed Hanoi. (Lakoff and Johnson 1980: 38)

ニクソン(政府)はハノイを爆撃した。(渡部・楠瀬・下谷訳 p. 58)

(4) David blinked. (Langacker 2009: 152)

[デイヴィッドはまばたきした。]

(3)において、爆撃を実際に遂行したのはニクソン大統領本人ではなく米兵であり、指示対象にズレが生じている。(4)にはそうした意味上のズレがないように思えるかもしれない。しかし、太字が表すのはデイヴィッドという人物(あえて言えばその全体)だが、まばたき行為に中核的に関わるのは全身ではなく目の周辺、特にまぶたである<sup>4</sup>。こうした表現を理解するには、注意を向けやすい対象(の概念)をまず想起し、それを介して、密接に関連する別の対象(の概念)にアクセスするプロセスが生じている。このような認知能力に基盤を持つ意味上の焦点移動は、一般にメトニミー(metonymy: 換喩)と呼ばれる。

メトニミーという概念は、複数の用法間に成り立つ関係にも適用することができる。expression や assignment のような動詞派生名詞はプロセスと結果の間で多義性を示すケースがあることが一般に知られている(Grimshaw 1990: 49 ff.)。expression は「表現すること」というプロセスと「表現された言葉」という結果の両方を表し、assignment も「割り当てること」というプロセスと「割り当てられた課題」という結果の両方を表す。以下の例で言えば、(5)の observations は動物の観察というプロセスを表す。(6)は「何かを観察した上で意見を交換する」という状況であり、この observations は観察したことで得られる結果、すなわち所見を表す。

- (5) his close **observations** of animal life in its natural setting

(OALD, s.v. *observation*)

[動物が自然な状態で活動する様子を彼が詳しく観察したこと]

- (6) share **observations** with each other

(TEX 加藤 2023: 120)

互いに気づきを共有する

(TEX 加藤 2023: 122)

概念上、プロセスと結果は近接した関係にある。動詞派生名詞がプロセスと結果という複数の用法を持つことが多いのは、この概念的な近接性に基づくものである。

メトニミーは生成語彙論や認知言語学において盛んに研究が進められてきた (Pustejovsky 1995: Ch. 3, 瀬戸 1997, 西村 2008 など)。その結果、単語の意味のレベルにとどまらず、より複合的な文法現象も含め、言語の隅々にまでメトニミーが行き渡っているということが実証的に示されている (Langacker 1995, 2009, 西村 2002)。

## 2.2 くびき語法によるテストとその例外

続いて本節では、メトニミーが多義性の中でも特異な性格を持つ可能性を示唆する。そのために、まずはメトニミーではない多義性を例にして、多義の一般的性質を考えたい。例えば draw a gun (拳銃を抜く) と draw a picture of a gun (拳銃の絵を描く) という表現がある。それぞれ単独では自然な表現だが、?She drew a gun and a picture of a gun. のように一括してまとめると不自然な響きとなる (Viebahn 2018: 751)。draw という単一の語に〈抜く〉と〈描く〉という複数の意味を一挙に担わせようと試みたわけだが、両者には概念的な隔たりが大きいために無理が生じたのだと考えられる。このように、複数の用法を一括した際に不自然になるかどうか、語義の個別性の判断基準として利用されることがある。これは「くびき語法によるテスト」(zeugma test) と呼ばれる。

しかしながら、一文の中でひとつの語に異なる意味を持たせても問題のないような事例が見つければ、このテストの有効性には限界があるということになる。そして現に、認知言語学者のラネカーはそうした事例の存在を示唆している。概念の捉え方 (construal) には柔軟さがあり、意味の焦点のシフト (すなわちメトニミー) が一文中で生じてもおお不自然にならない場合があるというのである<sup>5</sup>。

- (7) We shift from image to image with great facility, even **within the confines of a single sentence**, and freely create new ones when those suggested by linguistic convention do not satisfy our needs. (Langacker 1988: 11; 強調は引用者による)

[像 (image) = 捉え方は**単一の文中ですら**相当程度柔軟にずらすことが可能であり、何かを表現したいけれども慣習的な捉え方では間に合わない場合に、新たな捉え方を作り出すことも容易である<sup>6</sup>。]

言語学の内部はさておき、少なくとも教育の現場では一般に「文中での語の解釈は必ずひとつに定まる」のような素朴な考え方——あるいは教育的配慮に基づく一種の「方便」——が根強いと思われる (cf. Linell 2005: 78 ff.)。そうした固定的な意味観のもとでは、本稿冒頭で見たような例は説明が困難である。しかし上記のラネカーのコメントが裏付けられれば、伝統的なくびき語法によるテストの限界が示されるばかりでなく、冒頭で示した例文の謎解きをする上での手がかりも得られることになる。

ここまで紹介してきたメトニミーを部分的に整理しよう。下表の右端に当たるタイプの表現は「くびき語法によるテスト」では不自然になると予測されるが、postage や purchases はその反例となる可能性があるわけである。

表 1. 各種のメトニミー

	Nixon= (3)	observation= (5), (6)	postage= (1)
意味 <sub>1</sub>	ニクソン (責任者)	観察 (プロセス)	郵送料 (数値)
意味 <sub>2</sub>	米兵 (実行者)	気づき (結果)	証紙 (具体物)
ずれの所在	標準的な指示対象と特定の文中での指示対象の間のずれ	<u>異なる文で用いられた語</u> が表す複数の意味の間のずれ	<u>単一の文で用いられた語</u> が表す複数の意味の間のずれ

次節も引き続き、冒頭で見た例文の分析に進む前の準備段階である。本節で存在が示唆された、ひとつの名詞句が一文の中で複数の意味を表す事例が実際に存在することをいくつかのパターンに分けて概観していく。ただし、メトニミーの厳密かつ詳細な定義や分類は本稿の関心外であるため、具体例と大まかな特徴を挙げるに留めることとする。

### 3. 単一の名詞句が示すメトニミー的多義性

第1のパターンとして以下の例がある。太字の名詞句はいずれも特定の物体を一貫して表している。しかし、各種の下線を施した述語が表す事象に応じて、その物体の中でも個々の事象に特に中心的に関わる部分は文中で一貫していない。

- (8) They washed, vacuum-cleaned, and serviced **the car**. (Taylor 2003: 126)

[あの車だけど、洗車して、掃除機かけて、それから点検修理してもらったよ。]

- (9) **The phone** kept ringing, but no one bothered to pick it up. (西村 2008: 81)

[電話はずっと鳴っていたが、それを取ろうとする人は誰ひとりいなかった。]

- (10) We ate the cans of soup that were stacked in the pantry. (Langacker 2016: 23)

[備蓄棚に積んであった缶詰スープを飲んだ。]



(8) では、洗車するのは車の外部であり（車内まで水浸しにすることはない）、掃除機をかけるのは基本的に座席回りであり、点検修理の対象はエンジンなどである。(9) では、伝統的な電話機において、音を発するベルと手に取る受話器は別の部分である。(10) では、積むという行為を可能にしているのは外側の固い容器だが、飲むのはその内容物である。

つまり、太字の名詞句は指示対象のレベルでは「車」「電話」「缶詰」で一定しているとも考えられるが、少なくとも、個々の事象（洗車、鳴音、飲食など）に直接的に関わる部分、すなわち活性領域（active zone）は明確に異なっている<sup>8</sup>。それでもなお、前節で見た ?She drew a gun and a picture of a gun. とは違って、無理に一括したような不自然さは感じられないわけである。

第2のパターンとして、異なるファセット（facet：面）を用いた文が挙げられる。ファセットとは、語が表す意味の下位分類のひとつである。ある語が持つ読み（reading）のうち、存在する次元は異なるが自然に接続可能であるようなものがファセットと呼ばれる<sup>9</sup>。具体例としては以下のようなものがある。

(11) **The book is thick as well as boring.** (Geeraerts and Peirsman 2011: 96)  
[その本は分厚いし、そのうえ退屈だ。]

(12) **The friendly bank in the High Street that was founded in 1575 was blown up last night by terrorists.** (Cruse 2011: 107)  
ハイ・ストリートにあるあの1575年創業の親しみやすい銀行は、昨夜、テロリストたちによって爆破された<sup>10</sup>。 (片岡訳 p. 132)

本の厚みは物理的な実体に、退屈さは概念的な内容に関わる。銀行も、構成員と抽象的な組織と物理的な実体を備える。これらは存在する次元が異なるが、接続しても不自然には響かない。ファセットにはこれらの他にどのようなタイプがあるのか、その詳細は研究途上にあるが、次節では、上で示したものと異なるファセットの存在を明らかにする<sup>11</sup>。

第3に、作成者（author）と作成物（work）を表す語を用いた文がある。これらは概念的に密接な関連があるため、同一の名詞句が一文中で意味の焦点をシフトさせ、両方を表すことが可能である（cf. 角出 2023）。

(13) **Yeats is widely read although he has been dead for over 50 years.** (Nunberg 1995: 124)  
[死後50年経ってもなお、イエイツは広く読まれている。]

(14) **Similar remarks can be found in Chomsky (1975), who suggests ...** (西村 2008: 82)  
[同様の見解は Chomsky (1975) の中にも見られ、彼は…]

(13) において死んでいるのは詩人としてのイエイツであるが、読まれているのはその作品である。(14) では、in という前置詞からすると Chomsky は文献を指していると思われるが、who という関係詞からすると、その著者である人物を指示していると考えられる。

本節で見てきたような意味ないし指示対象の柔軟性は照応表現にも反映される。例えば組織とその構成員は集合 (set) として実質的に等価であるため、単複の呼応に揺れが生じることがある (15)。さらに大胆な照応が生じる例として、厳密には場所を表す先行詞が存在しないにもかかわらず、French という言語名から France という地名が喚起されることで there の使用が可能となる現象もある (16)。

(15) The committee has not yet decided how they should react to the Governor's letter.

[同委員会は、知事の手紙に自分たちはどう対応すべきかまだ決めかねている。]

(Quirk et al. 1985: 759)

(16) He speaks excellent **French** even though he's never lived there.

[あの人フランス語がすごい流暢なんですよ。向こうで暮らしたことないのに。]

(Langacker 2009: 67)

以上の例より、前節で存在が示唆された「表 1」の右端に当たる例が、英語の自然な表現として実際に存在することは十分に示された。この知見をもとにして、次節では、本稿冒頭に示した例文の分析に移る。postage や purchases の意味が文中で一意に決定できないというのは何ら不可解な事態ではなく、本節で概観した例の延長として理解できるのである。

#### 4. 例文の謎解きと教材の検討

本節では、postage (郵送料／証紙) ならびに purchases (購入プロセス／購入品) というメトニミーによる多義を、それぞれ「数値と具体物」(4.1 節)、「プロセスと結果物」(4.2 節) という類型に位置づけて順に分析する。その議論を経た上で、この種のメトニミー表現が TOEIC 教材でどのように扱われているか、という点に検討を加える (4.3 節)。

##### 4.1 数値と具体物

postage の例をはじめとして、ある名詞句の指示対象が、数値とそれに対応する具体物の間で揺れるという一群の事例がある。このメトニミーの類型を便宜的に「数値と具体物」という名称で呼ぼう。これはさらに A タイプと B タイプに下位区分することができ

る。前節ではファセットという概念を導入したが、「数値と具体物」はその一種と見なし  
てよいと思われる。

「数値と具体物」の A タイプには、次のように人数を表す名詞を用いた表現が該当す  
る。人数の値に対応する「具体物」とは個々の人間である。読者数 (readership) が「1  
万」という値であれば、1 万人の読者が存在することになる。

- (17) As an author she has a small but loyal readership. (OALD, s.v. readership)

[作家の彼女には、ささやかなながらも熱心な読者がいる。]

- (18) Feeding the growing world population is a significant challenge.

(OLDAE, s.v. feed)

[世界人口が増加するなか、いかにその食料を供給するかというのは大きな課題だ。]

- (19) So today I want you to brainstorm ways we could attract a greater turnout  
to our theater—especially a young audience.

そのため、本日皆さんには、当映画館にもっと多数の来館者——特に若年層の  
観客——を引き付けられそうな方法についてブレインストーミングしていただ  
きたいと思っています。(『公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 10』 Test  
1, Part 4, Questions 77-79)

(17) では読者層の形容として small とある。これは「小柄」ではなく「少数」の意で  
あり、人の数に注目している。しかし loyal は人数ではなく個々の読者の性質を語るもの  
である。(18) も同じく、feed の対象は具体的な人だが、増加 (grow) しているのは抽象  
的な数値である。「80 億」のような数値そのものに食料を与えることができないことは容  
易に納得できるだろう。(19) でも、集める (attract) 対象は人間であり、それに伴って  
増える (greater) のは人数である。

同様の事例は日本語でも観察される。以下の例では「これだけの」という部分との関係  
において「人数」は数値を表しているが、「中学に通えていなかった」という部分との関  
係においては具体的な人間を表している。

- (20) 県教委小中学校教育課は「これだけの人数が中学に通えていなかったとすると、  
さらなる潜在的な需要があるのではないか」とみている。

(読売新聞、2022 年 8 月 2 日、三重 中部朝刊 21 頁)

しかし、英語の population とは異なり、「人口」ではこの種の表現は難しいケースが多  
い。例えば (18) の “Feeding the growing world population …” を「増加する世界人口  
に食料を与える」と訳すと、少々不自然な響きになる。要因のひとつとして、population  
は人の総数を表すだけでなく、「人々」(≡ people) を表す用法も確立しているのに対し、  
日本語の「人口」はそうした用法を持たないことが挙げられる。こうした日英差に自覚的



であることの教育的意義は 4.3 節で触れる。

さて、本稿冒頭に (1) として掲載した例文も、「数値と具体物」というメトニミー類型の事例と見なすことができる。だが先ほどの A タイプとは異なる点があるため、B タイプと呼んで区別しよう。ここでの「数値」とは金額、具体物とは通貨類である。

(21) Postal clerks calculate and affix the correct postage on letters and packages.

[=(1)]

郵便局員は、手紙や小包に、正しい郵便料金を計算し、貼付します。

正しい (correct) 金額を求めて計算 (calculate) するのは送料の値であり、貼り付ける (affix) のはその額を示すラベル、証紙の類いだらう。すなわち、(21) の postage はメトニミー的な多義の間で揺れ動いている。例文作成時に参照したのか、単なる偶然の一致かは定かでないが、カナダ政府による英文にはほぼ同一の文言が確認できる。このことから上例は、異なる意味を無理に一括したような奇妙さのない、自然な表現と考えると差し支えないと思われる。

(22) Postal clerks calculate and affix the correct postage on letters, parcels and registered mail and receive payment from customers [...] (Government of Canada: National Occupational Classification: 1461 Mail, Postal and Related Clerks<sup>12</sup>)

類例としては次の文がある。

(23) Excuse me, I think you've given me the wrong change. (LLA, s.v. *change*)

[あの、お釣りってこれで合ってますか。]

間違っている (wrong) という判断は金額に関する評価、すなわち「適正な額よりも多い、あるいは少ない」と理解するのが自然である<sup>13</sup>。つまり、ここでも change (お釣り) という一語が「抽象的な数値」と、それに対応する「具体的な通貨」にまたがって用いられていることになる<sup>14</sup>。

A タイプで見た population の場合、食料を供給する対象の人口が 1 万人であれば必要となる食べ物は 1 万セットである。だがこの B タイプでは、送料が 84 円だった場合、必ずしも切手を 84 枚貼る必要はなく、その額に相当する切手などを貼ればそれで済むわけである。この点を考慮すると、B タイプのメトニミーは、売買に関わる背景知識ないしフレームに支えられていると言える (cf. Fillmore 2003: 228-231)。金額を計算し、その分の通貨などを渡す行為は日々行われている。そうした日常経験が、金額とそれに対応する通貨類のメトニミーを自然に解釈することを手助けするのだと思われる (cf. Langacker 1987: 383 ff.)。

## 4.2 プロセスと結果物

続いて purchases (購入プロセス／購入品) の分析に移る。メトニミーの概説のセクションで示した「プロセス」と「結果物」の多義性は、his close **observations** of animal life in its natural setting と share **observations** with each other という、「異なる文」で用いられた語の意味の間に見られる関係であった。こうした多義性を「単一の文」で用いられた名詞句が示すことがある。比較的分かりやすい例として以下がある<sup>15</sup>。

- (24) However, many recent hires noted challenges they encountered when they first started, especially with learning to use our computer system.

しかし、多数の新入社員は、勤務開始時に直面した課題、とりわけ当社のコンピューターシステムの使い方の習得に関するものについて指摘しました。

(『公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 9』 Test 2, Part 4, Questions 83–85)  
主節述語 noted との関係から判断する限り、hires の指示対象は社員である。そしてこれは雇用というプロセスの「結果」として得られる存在である。つまり、人自体はもともと存在するが、雇用契約を通じて初めて社員になるわけである。一方、修飾語の recent が作用する先は社員という人間ではなく、時間軸上に位置づけられる雇用プロセスである。〈社員〉の意味構造内には雇用プロセスが背景として存在し、recent はその部分にかかっているのである。

上で示した例は述語 (noted) を考慮した場合と修飾語 (recent) を考慮した場合とで、プロセスか結果物かで解釈が揺れていた。こうした不確実性がいっそう顕著なケースとして、文中にある複数の述語に応じて、プロセスと結果物の解釈が変わる例がある。

- (25) Italy's Corrado Barazzutti grimaces with pain as attendants care for his twisted right ankle which occurred in the second set with Vitas Gerulaitis of US Friday in San Francisco's Civic Auditorium. (福地 1985: 202)

[大意] コラド・バラズッチは痛みで顔をしかめ、付添い人が第2セットで生じた右足首の捻挫の手当をしている<sup>16</sup> (福地 1995: 72)

- (26) Orders placed on Morgan Clothing's online site normally arrive within five business days.

Morgan 衣料品店のオンラインサイトで注文された品物は、通常5営業日以内に届きます。(『TOEIC テスト新公式問題集 Vol. 6』 Test 1, Part 5, Question 112)

1 例目は care for (手当とする) との関連を考えると「捻挫した右の足首」という結果物に思えるが、occur (生じる) との関連を考えると「捻挫する」というプロセスと解さざるをえないだろう。2 例目の前半は place orders (注文する) という行為を表す慣用表現を下敷きにしており、そこにおいて order は「注文」というプロセスを表している。しか

し後半部分にある arrive との整合性を保つには、「注文したことで得られる商品」という結果物を表すと考える必要がある。

以上の議論を踏まえ、本稿冒頭に掲載した文（およびその類例）を検討しよう。

- (27) Furniture **purchases made online** may be returned or exchanged at any Tex Furniture location within 14 days of the original order date. [= (2)]

オンラインで購入された家具は、元の注文日から 14 日以内に、テックス家具のどのお店でも返品または交換が可能です。 (TEX 加藤 2013: 95)

- (28) Furniture **purchases made online** may be returned for any reason, so long as the packaging has not been removed.

オンラインで購入された家具は、包装が取られていなければ、どんな理由であっても返品できる。 (TEX 加藤 2017: 127)

(27) について TEX 加藤 (2013: 94) では、「述語動詞が may be returned or exchanged ですから、主語は「返品・交換できるモノ」でなくてははいけません。「購入」は、返品や交換はできませんよね。従って、ここでは「購入品」という意味が妥当であると分かります」と解説されている。たしかに、返品や交換ができるのは具体的なモノであるため、may be returned or exchanged との関係を考える限りにおいて、purchases は「購入品」を表すと言える。

だが、「オンライン上で make された」(ibid.) という部分の解釈はどうなるのだろうか。この点について同書は具体的な説明に踏み込んでいない。この部分を適切に理解するには、make a call (電話をかける) や make decisions (決断を下す) のような行為を表す複合表現、いわゆる軽動詞構文 (light verb construction) を考えるとよい。この構文に生起する名詞句 (call, decisions など) を主要部にすると、以下のような表現が得られる。

- (29) a phone call made by a business to try to sell something

(MWALD, s.v. cold call)

[企業が何かのセールス目的でかける電話]

- (30) Green firmly believed in the rightness of the decisions made by the public.

(OLDAE, s.v. right)

[グリーンは、国民が下す決断は正しいものであると固く信じていた。]

現在問題にしている (furniture) purchases made online も同様に解釈できる。すなわち、これは家具の物理的製作などを意味するわけではなく、「ネット上でなされた (家具の) 購入」という意味である。つまり上掲書は、made online との関係においては purchases がまさに購入プロセスを意味しているということ捉え損なっていることになる。その点で当該記述には加筆修正が必要と思われる<sup>17</sup>。

### 4.3 教材におけるメトニミーの扱いの改善案

当然ながら、本稿で議論したような内容に立ち入って解説するということは、一般の英語教材では現実的でない。しかし、学習者にとってメトニミーが表現理解の妨げになるケースがあることもまた疑いえない事実である (Littlemore 2009, Littlemore et al. 2018, Zibin et al. 2020)。教材の執筆者や語学教員がメトニミーという現象やその日英差 (e.g. “population” と「人口」の振る舞いの差) に関して一定の理解を持っていれば、そうした語句に関して、学習者にも分かりやすいような提示法の工夫を試みることはできるだろう。

TEX 加藤 (2019: [233]) の “... calculate and affix the correct postage on letters and packages” という例文では、postage という単一の語が、calculate と affix という述語に応じて異なる意味を活性化させている。このメトニミーは英語としてはごく自然だが、当該の例文に添えられた日本語訳は「手紙や小包に、正しい郵便料金を計算し、貼付します」 (= (21)) であり、主旨が掴みにくいものとなっている。この例であれば「郵便料金を計算し、その額の証紙を貼り付ける」のように、affix の目的語に当たるものを補うといった方策が考えられる。

だがこうした明示化は、内容が十全に理解できるようにという配慮である一方で、原文の語句との一対一対応からの逸脱にもなり、別の混乱を招く懸念はありうる。その点を重視するのであれば、いっそ例を差し替えることも教育的配慮としては有効だろう。

## 5. おわりに

本稿では TOEIC 教材に掲載されている一見不可解な例から出発し、各種のメトニミーを順に整理していくことを通じて、当該表現に自然な解釈を与えた。一般の英語教材においては、表現の意味を説明する際に重要な部分を取りこぼしている事例が散見されるが、本稿は認知言語学の立場からそうした不備を (ごく部分的にであれ) 改善することを試みた。

教育現場では「文中での語の解釈は必ずひとつに定まる」という素朴な意味観に基づく説明が少なくない (cf. Linell 2005: 78 ff.)。それは必ずしも暗黙の前提とは限らず、一種の方便として採用している場合もあるだろう。しかしいずれにせよ、そのような考え方のもとでは、「意味は柔軟にシフトしうる」という言語事実が見えにくくなってしまふ。認知言語学の主要な功績のひとつは、その固定的意味観の誤りを実証したことにある。

認知言語学と英語教育を接続することの意義は Langacker (2008) や Littlemore (2023) でもすでに提示されており、本稿はそのささやかな実践である。なお、本稿で論じた内容をそのまま教材に掲載したり、教室で伝達したりすべきであると主張しているわけではない。個々の教育者が適宜、取捨選択できるようにという、あくまでも情報提供として理解されたい。ともあれ、このような地道な架橋作業を通じて、言語研究と教育の実践とが有

益な形で少しでも進展していくことを願う。

## 謝辞

詳細なコメントをくださった二名の匿名査読者の先生方に感謝したい。その他にも多くの方々から有益な指摘をいただいた。氏家啓吾、神原一帆、佐藤らな、田中太一、出水孝典、野中大輔、平川裕己、平沢慎也、山泉実の各氏に感謝申し上げる。当然ながら、残る誤りはすべて筆者の責任である。

## 注

- <sup>1</sup> この書籍にはページ番号（ノンブル）が付されていないため、同書における例文番号を括弧書きで記載した。
- <sup>2</sup> 例文（2）は TEX 加藤が *English Journal* 誌に連載していた記事（TEX 加藤 2012）を書籍化したもの（TEX 加藤 2013）から引用した。細かい文言の修正はあるものの、元の記事と書籍版とで当該表現の解説に関して実質的な違いは見られない。
- <sup>3</sup> 例えば長谷川（2022）は、『公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 7』の解説（別冊「解答・解説」p. 44 問題 107）において、現在分詞と動名詞が混同されていることを指摘している。当該の記述は 2 刷以降で訂正されている。
- <sup>4</sup> この例はメトニミーの中でも特に「プロフィールと活性領域の乖離」（profile/active zone discrepancy）と呼ばれる現象である（Langacker 1984）。
- <sup>5</sup> 当然ながら、捉え方の柔軟さには限界もある。ラネカーのような研究者でも She drew a gun and a picture of a gun. が不自然であることには同意するものと思われる。
- <sup>6</sup> 「像」（image）は現在の認知文法の用語法では「捉え方」（construal）に更新されているため、念のため併記している。
- <sup>7</sup> 邦訳では p. 199 に当たる。ただし当該例文には訳が付いていないため、拙訳を掲載した。
- <sup>8</sup> Langacker (2009: 48) では An entity's active zone, with respect to a profiled relationship, is that facet of it which most directly and crucially participates in that relationship. と定義されている。
- <sup>9</sup> Cruse (2011: 116) では Facets can be described as fully discrete but non-antagonistic readings of a word. Another important characteristic is that they are characteristically of distinct ontological types. という特徴づけが与えられている。なお、Cruse 自身はファセットをメトニミーと峻別しているが、本稿では細かい分類には深入りせず、統合的な概念として「メトニミー」という用語を採用している。
- <sup>10</sup> ここでは既訳をそのまま利用しているが、実際には建物自体が親しみやすいこともあり



える。そのため、「愛想の良い」「親切な」などの訳語を採用した方が〈銀行員〉というファセットを明確化できると思われる。

<sup>11</sup> ファセットという概念の概要と新展開については秋田（2022）が参考になる。

<sup>12</sup> <https://noc.esdc.gc.ca/Structure/NocProfile?objectid=vyHqEDF0Z3IFT2kFBtR2NHCqjjREBFyUL1i2dH7SReU%3D>（2024年8月25日最終確認）

<sup>13</sup> もし仮に give との整合性を追求して、手渡し（give）される現金についての間違いだと考えるならば、使用できないお金（おもちゃのコイン、外国の通貨など）を誤って渡したのでは、と懸念を表明している解釈になるだろう。しかし理屈としてはありえても、日常的に生じる状況ではない。

<sup>14</sup> 日本語の例を挙げよう。交通系 IC カードの Suica では希望チャージ金額の入力が済んだ段階で「チャージ金額を入れて下さい」という音声アナウンスが流れる。だが「5000円」のように抽象的な「金額そのもの」を入れることは不可能であり、実際に要求されているのは「その金額分の紙幣・硬貨」の投入である。

<sup>15</sup> ただし、添えられた訳文にはいくつか改善の余地があると思われる。例えば、「多数の新入社員は」とあるが、この many は新入社員が総体として多いということではなく、大変だったという声を寄せた新入社員が多かったということだろう。また、「勤務開始時に」というのは任意の一日の始業時のようにも読めるが、原文の趣旨としては入社して働き始めた時期ということである。

<sup>16</sup> この英文は福地（1985）では「交替現象が生じている」例として「千葉修司氏の指摘による」と付記した上で英文のみが掲載されていたが、福地（1995）では簡略化して再録され、福地自身による訳が付された（そのため本稿では「大意」と断って併記した）。なお今井・平沢（2023: 72 ff.）には、この例に関する有益な解説がある。

<sup>17</sup> なお（28）の解説では「文意から、ここでの purchase は「購入品」の意味の**可算名詞**。」と述べられている（TEX 加藤 2017: 127、強調原文）。しかし、読者に与えられているのは purchases の部分が空欄になっている不完全な文である。正解がわからない段階で「文意」を前提にすることはできないため、この記述は論点先取になっている。挿入することで文が完成し、整合的な「文意」が立ち上がるような選択肢が正解である、と考えるべきだろう。

文章の読解にはボトムアップとトップダウンの理解が相互依存的に働いており、これは一般に「解釈学的循環」と呼ばれる（森・鈴木 2019）。上の解説は“... made online”というマイクロな部分に十分な注意を払わずトップダウン式に「文意」を持ち込み、〈購入品〉という解釈で断定していることになる。

## 参考文献

- Cruse, D. Alan (2011) *Meaning in language: An introduction to semantics and pragmatics*, 3rd edition. Oxford: Oxford University Press. 片岡宏仁 (訳) (2012) 『言語における意味：意味論と語用論』 東京：東京電機大学出版局.
- Fillmore, Charles J. (2003) *Form and meaning in language*, vol. 1: *Papers on semantic roles*. Stanford: CSLI Publications.
- Geeraerts, Dirk and Yves Peirsman (2011) Zones, facets, and prototype-based metonymy. In: Réka Benczes, Antonio Barcelona, Francisco José Ruiz de Mendoza Ibáñez (eds.), *Defining metonymy in cognitive linguistics: Towards a consensus view*, 89–124. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Grimshaw, Jane (1990) *Argument structure*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago and London: University of Chicago Press. 渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸 (訳) (1986) 『レトリックと人生』 東京：大修館書店.
- Langacker, Ronald W. (1984) Active zones. *Proceedings of the Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society* 10, 172–188.
- Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar*, vol. 1: *Theoretical prerequisites*. Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. (1988) An overview of Cognitive Grammar. In: Brygida Rudzka-Ostyn (ed.), *Topics in cognitive linguistics*, 3–48. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2008) The relevance of Cognitive Grammar for language pedagogy. In: De Knop, Sabine and Teun De Rycker (eds.) *Cognitive approaches to pedagogical grammar: A volume in honour of René Dirven*, 7–36. Berlin and New York: De Gruyter Mouton.
- Langacker, Ronald W. (2009) Metonymic grammar. In: Klaus-Uwe Panther, Linda L. Thornburg, and Antonio Barcelona (eds.), *Metonymy and metaphor in grammar*, 45–71. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins.
- Langacker, Ronald W. (2016) Nominal grounding and English quantifiers. *Cognitive Linguistic Studies* 3 (1): 1–31.
- Linell, Per (2005) *The written language bias in linguistics: Its nature, origins and transformations*. London and New York: Routledge.
- Littlemore, Jeannette (2023) ‘You’ll find Jane Austen in the basement’ ... or will you?

- Metonymy and second language learning. In: *Applying cognitive linguistics to second language learning and teaching*, 2nd edition, 143–169. Cham: Palgrave Macmillan.
- Littlemore, Jeannette, Satomi Arizono, and Alice May (2018) The interpretation of metonymy by Japanese learners of English. In: Ana M. Piquer-Píriz and Rafael Alejo-González (eds.), *Applying cognitive linguistics: Figurative language in use, constructions and typology*, 51–71.
- Nunberg, Geoffrey (1995) Transfers of meaning. *Journal of Semantics* 12 (2), 109–132.
- Pustejovsky, James (1995) *The generative lexicon*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech, and Jan Svartvik (1985) *A comprehensive grammar of the English language*. London: Longman.
- Taylor, John (2003) *Linguistic categorization*, 3rd edition. 辻幸夫、鍋島弘治朗、篠原俊吾、菅井三実 (訳) (2008) 『認知言語学のための14章〈第三版〉』東京：紀伊國屋書店。
- Viebahn, Emanuel (2018) Ambiguity and zeugma. *Pacific Philosophical Quarterly* 99 (4), 749–762.
- Zibin, Aseel, Abdel Rahman Mitib Altakhaineh, and Elham T. Hussein (2020) On the comprehension of metonymical expressions by Arabic-speaking EFL learners: A cognitive linguistic approach. *Topics in Linguistics* 21 (1), 45–61.
- 秋田喜美 (2022) 「オノマトペの意味のファセット性」松本曜・小原京子 (編) 『フレーム意味論の貢献：動詞とその周辺』213–227. 東京：開拓社。
- 今井亮一・平沢慎也 (2023) 『スローでディープな英文精読：〈ことば〉を極限まで読み解く』東京：研究社。
- 加藤, TEX (2012) 「奥様のための TOEIC® テスト講座」*English Journal* 42 (3), 50–51.
- 加藤, TEX (2013) 『TOEIC® テスト Part 5 できる人、できない人の頭の中』東京：アルク。
- 加藤, TEX (2017) 『TOEIC® L&R テスト 文法問題 出る 1000 問』東京：アスク出版。
- 加藤, TEX (2019) 『TOEIC® L&R TEST 出る単特急 金のセンテンス』東京：朝日新聞出版。
- 加藤, TEX (2023) 『TOEIC® L&R TEST 出る単特急 金の 1000 問』東京：朝日新聞出版。
- 河上道生 (1991) 『英語参考書の誤りとその原因をつく』東京：大修館書店。
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2014) 『TOEIC® テスト 新公式問題集 Vol. 6』東京：IIBC。
- 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2022) 『公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 9』東京：IIBC。

- 国際ビジネスコミュニケーション協会 (2023) 『公式 TOEIC® Listening & Reading 問題集 10』 東京：IIBC.
- 澤田茂保 (2020) 「英語の応答形式について：TOEIC の応答問題を分析する」『言語文化論叢』 24, 1-30.
- 澤田茂保 (2021) 「描写文の文法論：ジャンルとしての写真描写文」『言語文化論叢』 25, 47-73.
- 澤田茂保 (2022) 「会話文の文法論：TOEIC 会話問題の言語学的分析」『言語文化論叢』 26, 33-70.
- 角出凱紀 (2023) 「AUTHOR FOR WORKS 再考」『日本言語学会第 167 回大会予稿集』 303-309.
- 瀬戸賢一 (1997) 『認識のレトリック』 東京：海鳴社.
- 西村義樹 (2002) 「換喩と文法現象」285-311. 西村義樹 (編) 『認知言語学 I：事象構造』 東京：東京大学出版会.
- 西村義樹 (2008) 「換喩の認知言語学」森雄一、西村義樹、山田進、米山三明 (編) 『ことばのダイナミズム』 71-88. 東京：くろしお出版.
- 長谷川剛 (2016) 「TOEIC 問題における文法項目の説明方法について」『明治学院大学教養教育センター紀要：カルチュラル』 10, 37-45.
- 長谷川剛 (2022) 「英語の動名詞・現在分詞・形容詞の区別について」『明治学院大学教養教育センター紀要：カルチュラル』 16, 87-93.
- 福地肇 (1985) 「主要部・修飾部交替に関する一考察」『東北大学教養部紀要』 44, 195-209.
- 福地肇 (1995) 『英語らしい表現と英文法：意味のゆがみをともなう統語構造』 東京：研究社出版.
- 森邦昭・鈴木有美 (2019) 「読解と解釈学的循環：人工知能「東ロボくん」開発断念からの示唆」『文藝と思想』 83, 29-46.

〈辞典類〉

- LLA: *Longman Language Activator*, 2nd edition. Harlow: Longman. 2002.
- MWALED: *Merriam-Webster's Advanced Learner's English Dictionary*. Springfield, MA: Merriam-Webster. 2008.
- OALD: *Oxford Advanced Learner's Dictionary*, 10th edition. Oxford: Oxford University Press. 2020.
- OLDAE: *Oxford Learner's Dictionary of Academic English*. Oxford: Oxford University Press. 2014.

